HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 87
Issue Date	1935-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77675
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part23.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

昭和七年十一月十日發行

芒亭書屋談叢

九州博多の眞中の旅舍の一室。夜が更けた靜寂の中に聞くとはなしに聞いて居ると、か細い蟲の音がする。旅愁一入覺えつゝ靜かに聽き入りてあはれ深く思ふ中にと云ふ譯であつたが、よくもこんな街の眞中にあんな蟲が生きて居ると感じ入つたのである。古代に大陸との交通の門戸として開けたと云ふ此博多の、而かも恐らく其頃より街の眞中であつたと云はれ人家櫛比し尺土と雖も餘すところなき此旅舍のあたりの土地は、千年餘もこの方人の足に踏み固められた土である。其處にあの蟲の音がする。

次の朝、昨夜蟲の音がしたあたりを見廻はして蟲の隱れ家がどこに在るか探してみた。色々の庭木があるが、何十年この方鋸や鋏で加へられる丈の加工が施されたものである。庭石の間には天鵞絨で作つた樣な綺麗な苔がある。凡そ雜草らしいものは一本も見えない。石ころ一つだつて目的なしにはころがつては居ない。蟲は一體どこに棲んで居るのか。恐らく敷石の間の僅かの空隙か、庭石と庭木の間のほんの一寸した窪みなどにでも巣くつて居るのだらうか。其僅かな空隙の中から、周到な人爲の中に僅かに取り殘され居る自然の殘碎に、廻り行く四季の運行を觀取して、今年も秋を忘れないで昨夜もあんなに鳴いて居た譯であらう。

だがあの蟲の祖先は此博多の中心市街がまだ田園風趣豐かにして蓬生の原そこゝに在りし頃より、何時の間にか殷盛に趣き人爲の加はり行く都市の內に卷き込まれ而かも脈々として絕ゆる事なく生命の絲を續けて來たものか。而して今や極度に文化は進み人爲は加はり縮縮されつくした自然の細片の中に昨夜の蟲はまだ大丈夫生きて居る。

蟲がやがて棲めなくなつた都市には、どんな人間とそれからどんなものが棲むだらうか。

（芒亭）